

村の魅力を活かした観光 —エコツーリズムの視点から考える活性化戦略—

S.M.

1. 村の魅力を考える

行政学演習を受講してすぐ、先生から村に関するテーマを投げかけられた。私は村出身でそこでは観光産業が盛んだったこともあり、以前から興味があった「地域資源を活かした観光」「活性化」というキーワードがすぐに浮かんだ。近年日本全体として少子高齢化が問題になっている中、村はそれに加え都心への人口流出という問題を抱えている。国の政策として地方創生が謳われる中、地域活性化に繋がるような村の強みとは何か。

村の強みとは、自然が豊かでグローバル化した現在でも独自の文化が根強く残っているところではないだろうか。近年では大手企業のチェーン店が並び、北海道から沖縄まで都心ではどこでも同じような風景を見るようになった。どこにいても同じ品質のものを入手できる便利さを感じると同時に、世界が画一化していくような妙な気持になる。そんな中、歴史の中で築き上げられ、時代と共に深みを増した村に残る独自の文化の魅力は注目するに値するだろう。

今回レポートを作成するにあたって、そうしたことを出発点に村に所縁のないテーマパークやショッピングモールなどの新設ではなく、今村にあるもの、つまり村の魅力を活かした観光について、特にエコツーリズムの観点から考察していこうと思う。考察対象として村の自然や文化といった地域資源を活かした観光産業に力を入れている福島県の北西部に位置する北塩原村を取り上げる。そして村の現状、課題を検証しこれからの村づくりの可能性を見出していきたいと思う。

2. 村の概要

北塩原村は福島県北西部に位置する村である。産業としては北山・大塩地区は米作を中心とした農業が中心であり、高冷地農業のほか民宿営業を中心に観光関連産業が伸びている。桧原・裏磐梯地区は、明治 21 年(1888)年の磐梯山大噴火により、いくつかの川が堰き止められ、桧原湖、小野川湖、秋元湖、曾原湖、五色湖など 300 を超える湖沼群が生まれ磐梯山をはじめとする周囲の山々とあわせて美しい自然景観を創り出している。当地域は昭和 25 年に国立公園に指定され、福島県を代表する観光地となっており、観光産業が中心となっている。

次にその歴史であるが、北塩原村の誕生は明治 22 年に施行された町村制以来、北山村、大塩村、桧原村が設置され、昭和 29 年合併促進法によりその 3 つの村が廃止されたことによる。合併当時の旧 3 村は、道路事情も悪く、地域産業の停滞のみならず交流も滞りがちであったが、「裏磐梯高原」という貴重な財産のもとに計画的な社会資本の整備がなされ、着実に発展を遂げた。さらに国道 459 号の整備等により地域住民の交流もスムーズに行われるようになった。これらの基盤整備や喜多方、猪苗代方面の 2 つに分かれる生活圈などの現状を踏まえ、平成 15 年 12 月、近隣市町村との合併はせずに、住民の暮らしを最優先に考え自立の道を選択した。以降、立地を最大限に活かし、農業と観光を基幹産業として、

地域資源を活かした特色ある村づくりに取り組んでいる。¹

3. エコツーリズムという視点

エコツーリズムは、1990年代後半から注目された概念である。もともとは発展途上国において、観光客に森林などを見せて経済振興を図ることによって、森林伐採などの自然開発から自然を保護しようとする産業転換を促す考え方として注目されたことが始まりであった。その考えが先進国では持続的な観光振興を目指す概念として用いられるようになった。日本では先に述べたように1990年頃からエコツアーを実践する民間事業者が、屋久島などの自然豊かな観光地で見られるようになる。環境省(当時)は、平成3(1991年)に「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」を実地して、エコツーリズムに関する調査を開始し、1990年代後半には日本エコツーリズム推進協議会(現日本エコツーリズム協会)などの民間推進団体の設立が相次ぎ、エコツーリズムの普及に向けた動きが加速した。

このような動きから、平成15年から16年にかけて、エコツーリズム推進協議会が設立され、国をあげたエコツーリズムの推進が始まった。環境省は、同会議で策定された5つの推進方策を中心に、エコツーリズムの普及と定着に向けた具体的な取り組みを進めている。²

国際的にはエコツーリズムに関して、統一された定義がない。そこで日本エコツーリズム協会(Japan Ecotourism Society)は、エコツーリズムを次のように定義している。³

1. 自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。
2. 観光によってそれらの資源が損なわれないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。
3. 地域資源の健全な存続による地域社会への波及効果を実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。

また、同協会はエコツーリズムの実践にはこうした概念の周知や関連機関、住民、観光客それぞれの協力、エコツーリズムの概念が十分に反映されたプログラム作りが重要であるとしている。今回私がエコツーリズムに注目したのは、冒頭で述べた「土地の魅力を活かした観光」という私の設定テーマと、こうしたエコツーリズムの考え方が合致したからである。むやみに地域資源を観光に取り入れるのではなく、資源を保護しつつ観光を成立させることで地域振興をはかる、それが子や孫の世代までも繋ぐことができる観光の健全な形態であると考えた。観光によって村の魅力が失われては本末転倒になってしまう。実際に、エコツーリズムの概念が登場する前の1960年代後半から拡大した、自然環境を対象

¹北塩原村公式ホームページ|北塩原村：<http://www.vill.kitashiobara.fukushima.jp/>(2015年6月21日)

²エコツーリズムのススメ | 環境省：<https://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/> (2015年6月21日参照)

³日本エコツーリズム協会：<http://www.ecotourism.gr.jp/> (2015年6月21日参照)

とする観光地では、過度なツアーで自然環境に負荷がかかり、観光資源の質の低下をもたらしていた。観光客によるゴミの放置や落書きなどの問題、野生生物への餌やりによる動植物相の変化などの問題が報告されている。⁴

自然は人間の介入によってその生態系に悪影響を及ぼしやすい。村の活性化の一環として地域資源を観光に取り入れるのであれば、貴重な地域資源やその資源と共に生活している地域住民の為に健全なエコツーリズムが実践されることが重要となってくると考えた。

4. 北塩原村、エコツーリズムの実態

実際にこうしたエコツーリズムを実践している北塩原村を調査した結果を踏まえ、そのエコツーリズムの実態について述べる。調査するにあたって、実際に北塩原村に足を運び、商工観光課の方にお話をお伺いすることができた。

北塩原村の観光の特徴は、なんとといっても磐梯山を中心とした豊かな自然と触れ合うことができるところにある。1880年磐梯山の大噴火がもたらした地形の変化は多くの幻想的な湖を生み出し、1950年に磐梯朝日国立公園への指定を受けたことをきっかけに多くの観光客が北塩原村を訪れるようになった。1970年には道路等の環境整備(観光有料道路)、スキー場の建設、マスツーリズムの全盛によるホテル、ペンション、キャンプ場の建設が多く見られるようになった。それに伴い、北塩原村の就業人口の推移は1955年には第一次産業が82.3%を占めていたが徐々に第三次産業が増え、1975年には第一次産業が48.7%、第三次産業が32.1%となっており、10年後の1985年には両者の割合は逆転し、第一次産業が29.1%、第三次産業が40.6%となっている。行政資料によると平成22年が最も新しいデータとなっており、第一次産業が14.2%、第三次産業は60.5%と高い数値を示している。つまり村の基幹産業は農業・観光で形成されており、さらにどちらも自然との関わりが深いことが分かる。

こうしたことから、北塩原村は行政の取り組みとしても地区ごとの資源を活かした特色ある、個性豊かな村づくりを掲げている。また昭和60年に制定された村民憲章や平成22年に制定された磐梯山憲章では豊かな自然と寄り添いながら、自然を大切にし、後世へ継承できる形で村づくりを行うという考え方が明記されている。つまり北塩原村のエコツーリズムの原点はここにあり、一つの地域や企業だけの取り組みではないことが分かる。

具体的な取り組みをみると、北山地区・大塩地区・桧原地区・裏磐梯地区ではそれぞれの地域の気候、歴史や文化を中心にその地域特有の農業・観光産業が営まれている。ここでは観光に焦点をあてるが、大塩地区ではその昔大塩の名の通り塩分の強い温泉から「御用塩」を採ったとされており、平成20年には昔ながらの技法そのままに温泉水から塩を作る「会津山塩」を復活させ、村の特産品となっており、山塩ラーメンは人気がある。桧原地区では寒暖の差が激しい高原気候を活かして高原大根やとうもろこしなどの高原野菜の生産が盛になっている。時期になると道の駅裏磐梯にある直売所におろし、毎年多くの観光客が訪れ、取り立ての野菜を買い求めている。裏磐梯地区は福島県内でも随一の観光名所となっている。桧原湖や五色湖などの湖沼群に囲まれ、景観に配慮した建物が立ち

⁴ 敷田麻美(2008)『地域からのエコツーリズム 観光・交流による持続可能な地域づくり』京都：学芸出版社

並び、曾原、狐鷹森集落は平成13年、県優良景観形成住民協定の第一号に認定され、街全体がウッド調の色彩となっている。桧原湖を周っている「森のくまさんバス」は、地元のホテルなどから出た廃食用油を燃料に走行しており、自然環境に配慮したバスとなっている。また、この地区にはスキー場が3つあり、冬の観光を担うほか、ホテルやペンション、民宿、キャンプ場も多く、1年四季を通して全国各地からの観光客を迎えている。

その他にも北塩原村では一年を通して様々な地域資源を活かしたイベントが開催されている。多くの観光客が北塩原村を訪れるわけだが、同時にそうした資源を保護する活動も活発になっている。2010年には「日本で最も美しい村」連合に加盟し、「小さくてもすばらしい地域資源を持つ村の存在や、美しい景観の保護などを目的に、失ったら二度と取り戻せない日本の農山村の景観・文化を守る活動」を推進している。2011年には磐梯山が日本ジオパークに認定され、人と大地の関係を楽しみながら学習できる自然の公園、テーマパークとなっている。また、北塩原村はモニタリングサイト1000の調査対象地となっており、定期的に専門家によって生態系に異変が出ていないか調査されている。

以上の実態をまとめると、北塩原村では特定の場所、団体によってエコツーリズムが実践されているわけではなく、村全体の取り組みとしてその概念が村づくりに反映され、各地でエコツーリズムが実践されていることが分かる。またこうして大々的にエコツーリズムが実践されている背景には行政からの規制や関与が大きく関わっていることが分かる。

5. これからの課題と可能性

こうした北塩原村の今後の課題、可能性をお伺いしたところやはり観光産業を中心に多様化するニーズに合わせて着地型観光の推進を実地したいとのことであった。特に、特産品を活かしたグルメ、体験や人との繋がりが味わえる企画に重点を置いている。また、現在の観光の形では行政の規制によって地域資源は守られているものの、手つかずの自然が多く存在し、そうした資源を観光に取り入れたい観光課と自然保護団体との間で摩擦が生じており、両者の対立をどうした形で落ち着けるかが難しい問題となっている。また、北塩原村には多くの歴史遺産が存在しており、その歴史に詳しい人々も多く住んでいるが、こうした資源や人材が活かされていない現状がある。

解決策としては、やはり「自然との共存」という本来の方針を念頭に取り組む必要があるだろう。自然保護団体と行政は粘り強く打開案を議論すべきであり、利益優先とならない、後世に残せる形での開発が求められる。また活かされていない資源や人材に関しては、これもまた行政の力が必要となるだろう。現在大河ドラマや「歴女」という歴史好きの女の子が注目され、日本の歴史やその文化遺産はますます注目されつつある。こうした中で北塩原に眠っている歴史遺産がどれほど貴重で、魅力的であり、それを語り継ぐ人材が魅力を伝える為にいかに大きな役割を果たすのかということを経験者の方々へ説明していく必要がある。こうして地域住民の歴史遺産に対する認識が高まれば、歴史遺産を観光産業の中に取り入れることが可能になるのではないだろうか。また、こうしたことで住民の観光産業への参加率が高まり、観光客と住民の触れ合いも増えるので、ここでさらに魅力が生まれると考える。

これまでみてきた北塩原村の現状、課題から私たちは多くのことを学ぶことができる。実際に村に足を運び感じたことでもあるが、やはり村の魅力は実際に行き肌で感じてみ

て初めて分かるものである。採れたての野菜がずっしり重く、濃厚な味をしていること、広がる大自然の空気で心が落ち着くこと、歴史の産物は依然として凛と、その地に根を下ろしていること、人の温かさを感じられることなどこうした地域資源を活かした観光を、無理のない程度に進めていくことで持続可能な地域活性化戦略を実現することができることが分かった。また、こうした取り組みの上で行政の規制や専門家の協力がいかに大きな役割を果たしているのかということは特に重要なポイントである。北塩原村の実例から、これから地域活性化を考えていく村においても、その地域資源を今一度見つめなおすことで独自の観光の形を見出す糸口になると考える。